

スイク (Sikh) 教研究一序

橋 本 泰 元

はじめに

筆者は北インド中世期における民衆思想の研究を続けており、この数年間、その思想的土壌をなしていると思われるナート派祖ゴーラクナートの『語録』のテキスト研究とその和訳を行い本誌に発表を続けてきた。その結果、主要な部分である箴言的な内容の二行詩の部分（サバディー）の研究と翻訳は完了し、パドと呼ばれる詠歌の第1篇の一部の翻訳に着手したが、残りの2篇と小作品の研究が残っている。

しかしながら、筆者は現在、本学国際哲学研究センター第3ユニット（多文化共生研究）に所属しており、その研究活動の一環として、以前から関心のあったスイク教について、一昨年夏、パンジャブ州アムリットサル市にある中心寺院ハル・マンディルおよび関連する聖地・寺院を訪れる機会に恵まれたこともあり、スイク教根本聖典『グルー・グラント・サーヒブ』の翻訳研究の早期の必要性を痛感し、今回、欧米における優れた種々の研究書に依拠して、テキスト研究の第一歩としてスイク教聖典の概観をほぼ時間軸に従って行うことにした。

上記『語録』の研究は後回しにせざるを得ないが、いずれ完了する予定である。

1 スイク教文献概観

スイク教文献は、そこに示された信条のようにグル＝ナーナク（Guru Nānak）から始まる。第1代スイクのグル（教祖）であるナーナクの生涯は1469－1539年であり、宗団（パント Panth）は17世紀10年代の早い時期に創設されたと推定できる。グル＝ナーナクは、弟子たちに簡明で美しい宗教歌によって解脱の教えを説いていた。スイク教の信条の開

始は、これらの宗教歌と密接に結びついている。これらの宗教歌は17世紀10年代まではまったく記録されなかったのではあるが、これらの宗教歌をスィク教文献の基盤をなしているという明白な論理がある。

グル＝ナーナクが採り入れた帰依と教化の様式は愛弟子たちによって継承され、その結果、スィク教に特徴的なかなりの量の讃歌が作られるようになった。しかし、その増加はテキストにとって添加と信憑性という深刻な問題を来した。公認された作品の集成を記録する最初の試みは、第3代グル＝アマル・ダース (Amar Dās) の在位中 (1552-74年) に確かななされた¹。この集成は、グル＝ナーナクの長子が保有し、校合するのに手に入らなかった。そして時間が過ぎるにしたがって不安定な状況が出来た。信憑性のある公認できる作品をどのように記録するか、という問題であった。パントの指導者問題が持ち上がり、敵対側が正統派内部のものだと主張する讃歌を発表していたので、この問題は深刻であった。一般のスィク教徒は混乱し、真贋を見分けられなかった。

このように初期教団の前に立ちだかったこの聖典の真贋問題は、結局、第5代グル＝アルジャン (Arjan 在位1581-1606年) によって解決された。この問題に心を悩ませていたスィクたちが彼のもとに赴き、彼の敵対者の作品がどんどん広まっている深刻な問題を提示した。彼らが恭しく提案した要求は、信憑性のある作品、すなわちグルの認可を受け一般信者に信用された版を求めるものであった。グル＝アルジャンはこの提案を受け入れ、弟子のバーイー＝グルダース (Bhaī Gurdās) に、そのような作品の編纂を命じた。グル＝アルジャンの監督の下で編纂され1604年に完成した集成が、今日、『アーディ・グラント』(Ādi Granth 以下 AG と略記する)、『グラント・サーヒブ』(Granth Sāhib)あるいは『グルー・グラント・サーヒブ』(Gurū Granth Sāhib 以下 GS と略記する)として知られている。

この決定は、少なくとも二つの理由で重大であった。グル＝アルジャンがバーイー＝グルダースに責任を託したことによって、根本聖典の信頼の置ける版ができあがり、宗団に危機的な問題に対する恒久的な回答を与えることができた。バーイー＝グルダースは比較的早い時期に5人

¹ Mcleod, 1976 : 60-1

のグルたちの作品を慎重に校合して、信憑性のある根本聖典の保存を確実にしたのであった。同時に、彼は究極の権威についての疑問に対する永遠の回答を宗団内部に示す方法を用意したのであった。パント存続の初めの200年間は、この必要性は、第1代グルのナーナクから第10代グル＝ゴービンド・スィング (Gobind Singh) の1708年の死去に至るまで、10人の人間のグルの継承によって満たされた。伝承によれば、最後の人間のグルは自分の死後はグルの権威は共同体であるグル・パントと聖典GSに委ねられるべきであると宣告した。18世紀の間、この宣告の前者の側面は、当時の環境によく適していた。しかしながら、その後、特に効果的であることが判明したのが聖典の権威であった。

正統派のシク教徒たち全員が永遠のグルとみなしているのも、ADはシク教文献のいかなる議論においても首位の立場を占めている。ADは「グルの顕現した身体」であり、グルにのみ相応しい尊崇を受けている。理論的には、ADはこの立場と権威を第2の聖典と分け合っている。しかし実際には、ADは尊崇と注視の点において至高の立場にある。

第2の聖典とは、グル＝ゴービンド・スィングに関連するかなりな大きさの集成である『ダサム・グラント』(*Dasam Granth* 以下DGと略記する)である。これもグルの称号を持っているが、ほとんどの部分はめったに読まれない。このことは言語が難しかったり、ヒンドゥー教の説話にかなり注意を払っていたりすることで説明できよう。後者の特徴は、その年代論を引き起こし、現代でも宗団内部に広がっているDGに対する相反する態度の説明にもなっている。しかしながら、最高の崇敬を集めている詩句や、パントの日常儀礼に採り入れられている詩句もある。このような詩句すべては、グル＝ゴービンド・スィングに帰せられるものである。

聖典の階層の第3番目に位置づけられているのが、グルたちの時代から傑出した詩人であるバーイー＝グルダースとバーイー＝ナンドラールの(Nandlāl)の作品である。バーイー＝グルダースの生涯は第3代から第6代グルにかけて、またナンドラールの生涯はグル＝ゴービンド・スィングの時代に属す。彼らの作品は聖典という意味ではADとDGに及ばないが、その特異性においては両者と違いはない。ADとDSの内容とは別に、彼らの作品はグルドワラー (gurdwārā シク教寺院)

での讃歌として伝統的に認められている。

このような差異が重要なのであって、このことがこれらの4つの集成にスィク教聖典としての地位を与えているのである。しかし、スィク教の宗教伝統において実質的な影響を及ぼしている他の2つの初期資料が存在する。一つが「ジャナム・サーキー」(*janam sākhi* 以下JSと略記する)文献であり、もう一つがラヒット・ナーマー (*rahit nāmā* 以下RNと略記する)文献である。JS文献は初代グルの伝記であり、その多くが物語形式の逸話の選集であり物語構造をもった評伝である。初めて登場して以来—おそらく16世紀後半—、JS文献はパント内で広く受け入れられており、その発展が止んでから久しいが、一般信徒への強い影響は現代でも続いている。

RN文献はパント特有の行動規範を記録しており、ラヒットとして知られる規定された行動様式は、伝統ではグル=ゴービンド・スィングに帰せられている。特定のRNがグル=ゴービンド・スィング自身から発したと示すことが可能であるならば、それは明らかに聖典としての地位を占めたであろう。なぜならば、ラヒットはパントの生活にとって根本的に重要な特徴をもっているからである。しかしながら、RNのどのテキストもこのような証拠をもっていない。RNの最初期の文献は第10代グルの実際の言葉を記録したと主張しているが、確実なテキストはない。現代の「権威ある」版である『スィク・ラヒット・マルヤーダー』(*Sikh Rahit Maryādā*)は、第10代グルの正確な言説として宗団内で広く受け入れられている。

文献の階層の低いランクを占めるものとして、一連の歴史的な作品があり、それは18世紀初期から始まり20世紀に至まで断続的に著されている。こうした歴史的な作品の初期のものはJS形式の文献から後代のグルたち—特にゴービンド・スィングに至り、強調点が信愛(バクティ)から闘志にあふれた忠誠心に移行している。結果的に、これらの文献はパントの一般的な歴史書へと展開したが、英雄的行為や宿命に対する特有の力点を取り払うことはなかった。こうした歴史的な方法は、18世紀に、パントのなかで顕著になった好戦的な運命に対する感覚を挑戦的に表現し、結果的に同じ精神を後世に伝えたスィク教徒たちの特に宗教的な伝統にまさしく属する作品を生んだのである。この精力旺盛で自信に

満ちた歴史的な方法論はいまだに活気がある。

最後に教学書の範疇の文献があり、それはおよそ一世紀前にパント内で開始し、形式や教義の力点に特に変化なく今日まで続いている。この伝統を模倣し明らかにこの伝統に沿って形作られた多くの書物、パンフレットそして新聞がスィング協会 (Singh Sabhā) の支援のもとで、あるいはこの協会と深く関係する個人から発刊された。スィング協会は、19世紀後半のパンジャブ地方で西欧文化の挑戦に対抗する改革主義運動とであり、スィク教団の深刻な衰退の証左であった。

2 『アーディ・グラント』(『グルー・グラント・サーヒブ』)

正統派のスィク教徒にとってGSはグルであり、この聖典に対する取り扱い方を目撃すれば、人々のこの聖典に対する深い尊崇の念に感銘を覚えざるを得ない。この崇敬の念は、いろいろな方法で示される。公的なグルドワラー—そして多くの個人のグルドワラー—において、この聖典は天蓋の下に安置されている。人はその御前に参ると低頭礼拝し、聖典台より低いところに座らなければならない。聖典は使用されていないときは布で覆われ、開かれているときは何時でも扨子が払われなければならない。この聖典を移動しなければならないときは頭上に載せて運ばなければならない。群衆の中を通らなければならない場合は、この聖典が通ると前触れを出さなければならない。スィク教のすべての儀礼は、この聖典の御前で執り行われ、篤信のスィク教徒は一日に少なくとも一度は聖典の一節を読誦することが求められている。また彼らは、聖典の教えに従って自ら進んで努力することが求められ、特別な機会には聖典の不断の読誦 (akhaṇḍ pāṭh) を行うことが期待されている。

ADには三本の校訂本があり、うち二本が真正と認められている。ジャラダンダル (Jalandhar) 県カルタールプル (Kartārpur) 市在住のある家が、バーイー=グルダースが書写した原版と信じられている写本を所有しているとされている。17世紀後半のある段階でグル=テグ・バハードウル (Tegh Bahādur) の作品が付加されて、今日ダムダマー (Damdamā) 版として知られている。第3の校訂版は、いわゆるバンノー (Banno) 版でありカルタールプル版を補っているが、その方法はパント

が長らく受け入れられないとみなしている。標準的な権威ある版はダム
ダマー版である。バンノー版は異端版として厳禁とされている²。

これらの三版の相違点はテキスト論として重要であるが、それらは
ADの構成になんら影響しない。グル=アルジャンの編纂した聖典は、
顕著に体系的な集成である。全体を通して、規則的なパターンが明らか
であり、このパターンの例外はほとんど見つからない。現代の諸刊本の
場合、基準となるページ数を保持するまでに、この規則性は保たれてい
る。すべての版が全1,430ページからなり、個々のページの印刷内容ま
で性格に対応している。全巻は次の基本的な範疇に分けられ得る。

序の部分	pp. 1-13
ラーガの部分	pp.14-1353
様々な作品の部分	pp.1352-1430

序の部分は次の3部分からなっている。

- (1) グル=ナーナクの「ジャプジー」(*Japji*):この前に「根本マントラ」
(*Mūl Mantra*)があり、グル=アンガドの偈で終わる。この作品は、
グル=ナーナクの教えの要約と見なされており、日の出直後に敬虔
な教徒によって毎日唱えられる。
- (2) 「ソーダル」(*Sodar*):9篇の偈の集成で、4篇はグル=ナーナク、
3篇はグル=ラームダース、3篇がグル=アルジャンの作品であ
る。この集成の名称は、最初の偈(「ジャプジー」の第27偈の異読)
の冒頭の語彙からつけられたものである。この9篇の作品は、日歿
の儀礼で常に唱えられる集成の「ソーダル・ラヒラース」(*Sodar
Rahirās*)の部分をなすものである。
- (3) ソーヒラー(*Sohilā*)またはキールタン(*Kīrtan*)・ソーヒラー
五篇の偈の集成で、3篇がグル=ナーナクの作であり、他がグル
=アマルダースとグル=アルジャンの作品である。この部分は夜の
就寝前や葬儀の直前に唱えられる。

² MacLeod, 1976 : 73-9.

「ソーダル」と「ソーヒラー」のすべての讃歌は、おのおの適切なラーガに基づいて連続して唱えられる。このラーガはジャブジーのラーガを含んでいる。ラーガの使用がADの初期に現れたことは、それらのラーガがADの原本が編纂された1603-04年ころにすでに宗教儀礼的な機能を獲得していたことを示している。

ラーガの部分がADの大部分を占めており、ADの区分や細区分を示す特徴的なパターンをなしている。すなわち基本的な区分の基準がラーガなのである。最初のラーガはスイリー・ラーグ (Sirī Rāgu) で、次にマージ (Mājh)、そしてガウリー (Gaurī)、アーサー (Āsā) と続き、全体で31種のラーガが用いられている。これらのどのラーガにも、偈の長短や作品の性質によって細区分されている。

ラーガの部分の最後に、「バガット・バーニー」(*bhagat bānī*) が続く。この集成はさまざまな宗教詩人、特にカビール (Kabīr)、ナムデーヴ (Nāmdev)、ラヴィダース (Ravidās) らバガットたちの作品 (*bhakta vānī*) からなり、かれらの信条がグルたちのそれに相応しているので、ADに確かに組み入れられたのである。

このラーガのもう一つの細区分は、最初にグル＝ナーナクの作品が置かれ、その後に代々のグルの作品が置かれるというものである。一見して、たいへん複雑な構成になっているように見える。しかし、実際は単純な構成であり、ラーガの部分全体をほとんど一貫している。

ADの末尾に、短いエピローグがあり、さまざまな一連の作品がある。これらのなかで顕著な作品は、スーフィーの導師シャイフ・ファリード (Shaikh Farid) とカビールに帰せられる二行詩の作品である。

ADの最末尾には、グル＝テグ・バハードゥルの57偈の作品とグル＝アルジャンの2偈の作品、そして「ラーグ・マラー」(*Rāg Mālā*) と名付けられたラーガに関する奇妙な記述がある³。

最後に注意すべきは、ADの言語である。さまざまな学者が異なった見解を提示しているが、ADの言語は概してサントの言語と見なせよう。この言語は、現代パンジャービー語と現代ヒンディー語の両方にきわめ

³ この部分の構成に関する議論は、McLeod, 1982: 286-8を参照。

⁴ McLeod, 1976: 69-70.

て近く、15-6世紀の北インドの宗教詩人によって広く使われていた⁴。

ADはすべて、現代パンジャービー語の表記に用いられるグルムキー(Gurmukhī)文字で記録された。この文字がグルたちと深い関連をもっていたために、この文字はパント内で相当な神聖さを獲得できた。英語による作品以外、スィクの文献のほとんどは、実際グルムキー文字で表記されているのである。

3 『ダサム・グラント』

『ダサム・グラント』の起源については、単独の作品であり、また単一の集成に編纂された方法の点において、相当な疑義がまわりついている。その名称さえ不確定である。「ダサム」は「第10番目の」を意味し、第10代グル=ゴービンド・スィングの作品の集成であることを示しているると一般的に理解されている。しかしながら別の主張もあり、この集成は、より大きな広本の第10番目の部分をなしているのので「ダサム」と名付けられたのであり、広本の多くはグル=ゴービンド・スィングの時代に起きた妨害によって散逸した、というものである。

DGはふつうADと混同されているが、この二つの聖典は完全に別である。内容の点で重複はなく、それぞれの大要は相当に異なる。ADは、神の名号への瞑想による解脱を明らかに、首尾一貫して説いている。それに対してDGは、内容は種々であり、その多くの関心はヒンドゥー教のプラーナ聖典の神話と、宗教的信条とほとんど関係ない奇譚に払われている。

DGの内容は、以下の4グループに分けられよう。第1は、自伝あるいは少なくとも伝記と考えられる2篇の作品である。両作品ともグル=ゴービンド・スィング自身に関わるものである。『バチタル・ナータク(不思議な劇)』(*Bacitar Nāṭak*)において、グル=ゴービンド・スィングは自分の家系、前世におけるヒマーヤ山で苦行者として化身したこと、人間として誕生せよと神のお告げがあったこと、そしてシヴァーリク山脈において近隣の王たちとの戦いを語っている。『ザファル・ナーマー』(*Zafar Nāmā*)は、このグルがムガル皇帝アウラングザーブに大胆にも宛てたペルシア語による書簡である。

第2のグループは、第10代グルに帰せられる帰依を詠う讃歌で4篇よりなっており、第10代グルの武人としての忠誠心とその実例を劇的に表現している。「ジャプ」(*Jap*)、「アカール・ウスタト」(*Akāl Ustat*)、「ギヤーン・プラボド」(*Giyān Prabodh*)、「シャバド・ハザーレー」(*Śabad Hazāre*)の4篇である。「ジャプ」は、ナーナクの「ジャプ・ジー」と混同してはならないが、名称が似ているので誤解が生じやすく、事実、この両方が早朝の儀礼に用いられている。この「ジャプ」は、「アカール・ウスタト」とともにかなりの影響力をもっている作品である。

第3のグループは2篇の作品で、「サヴァイツイエー」(*Savayye*「讃辞」)と「シャスタル・ナム・マーラー」(*Śastar Nām-mālā*「武器の一覧」)である。

第4の部分が、この聖典の実質的な箇所であり、伝説的な物語と民間の多くの逸話である。この中で主要な物語が、クリシュナ神話と女性の奸計に注意を促す物語である。この部分がこの聖典の刊本の1185ページを占め、他の3部分は237ページを占めているに過ぎない。

DGは学者の注目をほとんど集めていなかったため、今日でも未解決の問題が起きている。著述者に関する伝統的な回答は、この作品全体がグル＝ゴービンド・スィング自身ということである。注意深く見れば、最初の3部分がかれの作品であるとは思われず、最後の作品はかれの側近の作品と思われる。厳密に解釈すれば、『ザファル・ナーマー』以外は何れもかれに帰することは困難である。

DGが比較的軽視される明らかな理由は、主に使われている言語である。そのほとんどがブラジュ語(*Braj Bhāṣā*)である。ブラジュ語は当時のバクティ文学で多に用いられたが、今日のパンジャブ州において理解されるかどうか大きな問題となっている。しかし、この点だけでは軽視されてきたことの説明にはならない。第4の部分の内容の性質が、軽視の理由となっているものと思われる。DG全体は、重要性和需要の点においてADにはるか及ばないが、いくつかの作品は人々に影響を与えている。

4 バーイー＝グルダースとバーイー＝ナンドラール

グルダース・バッラー (Bhallā) は、16世紀中葉に生まれ、第3代グル＝アマルダースと親縁関係にあり、その死(1633年)までグルたちと親密な関係にあった。この間に、グルダースは伝道師、執事そしてグルたちの使者としてパントに仕えた。そして前述したように、かれはADの編纂時期に書生としてグル＝アルジャンによって任命された。しかし、かれの不朽の貢献は、詩人として、また教学者としてのものであった。グルたちを別にすれば、かれがパントの中で最初で最も偉大な教学者として現れ、かれの作品全体が「GSの鑰」して知られているのはもっともなことである。敬虔な信仰と学識によって、かれの名前に敬称の「バーイー」(Bhāi「兄弟」)が付けられている。

バーイー＝グルダースの作品は、39篇の長いワール (*vār*) という詩編と、カビット (*kabitt*) というより短い詩編からなっている。後者の作品はブラジュ語で著されており滅多に読誦されない。しかし、ワールはパンジャービー語で著されており信者にはとっつきやすい。ワールの詩的な質は様々であるが質の高い作品もあり、全体として関心を引く資料を含んでいる。物語風のワールもあり、初期のグルたちの生涯のエピソードや著者自身の時代に起きた出来事を語っている。多くの詩編は教学や解釈を扱うものとして分類できるものである。このようにワールは、グルたちの教説の理解を広げてくれる。

ナンドラール・ゴーヤー (Goyā) は別のタイプの詩人であり、伝統的にまた公的にはバーイー＝グルダースと並び称されているが、かれの作品はあまり影響を及ぼさなかった。さらに、かれの作品の言語も、軽視された理由であり得る。かれの真正の作品の言語はすべてペルシア語であり、比較的に限られたエリートたちの間にしか広まらなかった。パンジャービー語の翻訳が存在するが⁵、ペルシア語の詩は類音や子音韻などの技巧を使うので、十分な翻訳はかなり困難である。

⁵ ナンドラールのペルシア語の全作品とパンジャービー語翻訳は、Ganda Singh (ed.), *Bhāi Nandlāl Granthāvalī* (Malacca, 1968) を参照。

ナンドラールの詩の特徴も、その限られた流布の原因であったかも知れない。かれはグル＝ゴビンド・スィングと密接に関わっていたが、かれの作品には当時の尚武の気質がなく、おそらくそのためにかれの作品は DG に収められなかった。かれの姿勢は AD の精神により近いものであり、解脱の確実な方法としての神の名号への瞑想を繰り返し強調している。かれの傑作は、長編の「ディーワーン」(*Dīwān*)と「ズィンダギー・ナーマー」(*Zindagī-nāmā*) である。「ディーワーン」は61篇のガザル (*Ghazal* 「頌歌」) からなり、「ズィンダギー・ナーマー」は510篇の二行詩からなっている。「ゴヤー」とは、かれのペンネームで「語る人」の意味である。グル＝ゴビンド・スィングの死後、かれはムルターン (*Multān*) に退き、そこで1712年に亡くなった。

5 「ジャナム・サーキー」

パントの創始者であり初代グルであるナーナクが、後代のスィクたちの格別な崇敬を受けていたことは当然である。この崇敬の念が様々な「ジャナム・サーキー」、すなわちナーナクが行った多くの奇跡と天分を強調するグルの伝記的記録のなかに強く織り込まれている。

最初の JS がいつ記録されたか分からないが、十分に展開したこの伝統がバーイー＝グルダースの時代に存在していて、かれの第1番目の「ワール」にその証拠が見られる。17世紀に、様々な JS が著されて多様になった。18世紀にこの発展は緩んだが、1823年にサントーク・スィング (*Santokh Singh*) が『ナーナク・プラカーシュ』(*Nānak Prakāś*) を著し、その後19世紀後半に石版刷りの技術が導入されて以来、この伝統はさらに発展して20世紀初頭までに膨大な量の JS が流布するようになった。そして、今日、相当な人気を保っているのである。

ほとんどの JS はグル＝ナーナクの生涯の逸話の集成であり、年代順におおまかに編まれている。信者の特に関心があり注目を引いている時期は、ナーナクのタルワンディー (*Talvandī*) 村における幼年時代とパンジャブ地方を越えたナーナクの巡歴の旅の時代である。様々な物語が逸話の形式 (*sakhī*) で著されている。単純な奇跡の物語もあれば、道徳的な物語もある。それらの多くは、ナーナクの作品から引用されて

おり、物語の部分は特定の偈文や連続する二行詩を用いているため場面設定として機能している。解釈が加えられており、そのため物語が後方に退いて学問的関心が前面に出ている場合もある。

16世紀後半と17世紀に、JSのいくつかの特徴ある伝統が現れた。この伝統は、逸話の採用の仕方、矛盾する年代論そして関心のあり方においてお互いに異なっている。より重要な伝統は「プラータン」(*Purātan*)、「バーラー」(*Bālā*)、「ミハルバーン」(*Miharbān*)、「アーディ・サーキー」(*Ādi Sākhī*)そして後代の『マヒマー・プラカーシュ』(*Mahimā Prakāś*「栄光の輝き」)である。この最後の伝統は、『マヒマー・プラカーシュ・ワールタク』(*Mahimā Prakāś Vārtak*)という散文のJSと『マヒマー・プラカーシュ・カヴィター』(*Mahimā Prakāś Kavītā*)という韻文のJSからなっている。これらの集成のなかで「ミハルバーン」の伝統が教義と解釈の方向に傾いているのに対して。他の伝統は物語である。18世紀の、いわゆる *B40 Janam-sākhī*⁶は、いくつかの異なる伝統を引き、様々な形式を結合して著された。様々な伝統は同じ逸話を重複して採用しているので繋がっているが、それらを区別する相異は大きく、一つの伝統の内部ですら、相当な多様性があるのである。

JSの逸話の形式は、当時のパンジャブ地方のイスラーム教徒のあいだに広く伝わっていた初期のスーフィーたちの例に基づいているように思われる。いくつかの逸話も、新しい内容に合わせるように修正して、スーフィーの源泉から借用されている。他の逸話は、ヒンドゥー教の叙事詩やプラーナ、あるいはナート(Nāth)派ヨーガ行者の伝統から借用されている。少数の逸話のなかには、特定の物語の背後に真正の出来事があるように思われる。スイクの伝統に特有の題材は、グル＝ナーナクの作品のなかの関連箇所から、あるいは教学の枠組みとしての詩編全体から発展したものである。

JSが永く愛好されているのは、容易に説明が付く。JSが生き生きとした魅力ある散文体で著されており、その文体が口頭伝承や要約して提示するのに適しているからである。JSは聖典としては認められてはい

⁶ この特殊なJSは英訳されている。W.H. McLeod (trans.), *The B40 Janam-sākhī*, (Amritsar, 1980). JSの様々な伝統の概要については、McLeod, 1980, ch. 3を参照。

ないが、パントの生活と信仰に影響を与え続けている⁷。

6 「ラヒット・ナーマー」

スィク宗団の初期から、グルたちの崇拝者は、信仰に適った生き方が期待されている。パントが発展して、確実な特徴がかなり明らかとなった。特に敬虔なスィクたちに期待される信仰の修練である。しかしながら、第9代までのグルたちの時代に見られる限られた範囲と、18世紀、19世紀に出された相当な量の教令とのあいだにはかなりの相異がある。第10代グルの指導の下、またかれの1708年の死後の波乱の数十年間に重大な変化が起きたのである。

この時代から出現した行動規範は「ラヒット」といわれ、それを公布する方法としてできた手引き書がRNである。「ラヒット」の発展のなかの決定的な出来事は、グル＝ゴービンド・スィングが「カールサー」(Khālsā) 同胞団を1699年に創始したことであった。詳細の多くは不明であるが、この決定的に重要な機会に入団儀礼が行われ、入団儀礼を受けた全員に行動規範が発令されたことは間違いないであろう。この規定が増大したことは明らかだが、1699年に行われた式典は公式の「ラヒット」の出現の根本的な出来事として常に見なされている。

グル＝ゴービンド・スィング自身はRNを書かなかったが、かれの命令で書かれた、かれの実際の言葉を記録したと主張する手引き書がいくつかある。このような主張を真正なものと認められる例は、まったくない。現存する初期のRNは18世紀中葉のものと思われる。それが『チャウパー・スィング・ラヒット・ナーマー』(*Caṇṇā Singh Rahit-nāmā*)であり、グル＝ゴービンド・スィングの使者の作品と伝えられている。次の作品は作者不明の『ブレーム・スマーラグ』(*Prem Sumārag*)で19世紀のものである。他には2篇の短いRNがナンドラールに帰せられ、『タンハー・ナーマー』(*Tankhāh-nāmā*)と『ブラサン・ウツタル』(*Prasan-uttar*)である。これらの年代は不明であるが、ナンドラール・ゴーヤーとの強固な関連づけをすることは困難であろう。同じような

⁷ *Janam-sakhī* の詳細な研究は、McLeod, 1980を参照。

RN がプラフラード・スィング (Prahād Singh) という人物に帰せられている。かれも、グル＝ゴービンド・スィングから直接教えを受けたと主張している。このスタイルを踏襲するもう2篇の手引き書は、デーサー・スィング (Desā Singh) とダヤー・スィング (Dayā Singh) という名前をもって、両者とも真正性を主張している。19世紀中葉に位置づけられる教令の集成が、『ソウ・サキアン』(*Sau Sakhian*) である。

この集成が示しているように、19世紀後半には様々なRNが存在していた。まさにこの時期に、スィング協会の改革運動がパント内部に現れ、その活動の主な目標の一つが、グル＝ゴービンド・スィングの意図をパントがどのように理解したかを正確に表す、満足のできるRNの編纂事業であった。1915年に発刊された手引き書は失敗に帰し、1931年に再度行われた。原稿は早く用意されたが、発刊は遅れ1950年であった。それが、『スィク・ラヒット・マルヤーダー』(*Sikh Rahit Maryādā*) という題名の最終版であり、「ラヒット」の合意内容に対する要求に応えた比較的短い綱要である。

7 「グル・ビラース」の伝統と後代の歴史的作品

グルたちの時代に、パントの性格と政策が急激な変化を遂げた。初期のグルたちは、宗教指導者であり神の名号の教えを説き、当時のムガル帝国の注目をほとんど引いたことはなかった。しかしながら、グル＝アルジャンはムガル帝国による監禁中に歿し、かれの息子グル＝ハルゴービンド (Hargobind) は闘争的な姿勢をとった。この新政策は1644年ハルゴービンドの死後後退したが、1675年グル＝テグ・バハードゥルが処刑されたのちに回復し、グル＝ゴービンド・スィングのもとで頂点に達した。1699年、カールサー同胞団が結成され、それ以来パント内部に力強い推進力となっている。

18世紀は積極的な尚武の精神に適した時代状況となり、スィクたちにとってパントの歴史のなかで、この時代が英雄時代となった。パントは18世紀前半の数十年間はムガルによって抑圧されていたが、ムガル権力はすぐに崩壊し、18世紀中頃までにスィクの戦士隊 (いわゆるミスル *misl*) はバンジャープ地方の覇権を獲得しようとしていた。ランジート・

スィング (Ranjit Singh) 配下のミスルと統合されて勝利を獲得し、ランジート・スィングはパンジャープのマハーラージャー (Mahārājā) として認められるに至った。

パントの形態と主流の思想が変化したように、その宗教的な考え方や文献も変化した。JSは初期の人気を保持し続けたが、18世紀と19世紀初頭にグルたちの生涯への新しい取り組み方が現れた。これが、「グル・ピラース」(*gur-bilās* 「グルの光輝」以下GBと略記する)形式であり、グルたちの勇敢を称賛しかれたらの戦闘技術を賛美する作品である。当然ながら、その作者は二人の偉大な戦士ハルゴービンドとゴービンド・スィングに焦点を当てている。

GBは、JSと同じように、グルたちの実際の生涯よりは作者の信仰の立証と同時代の状況を表しているものとして重要なのである。GBの伝統は、ある意味でJSの精神とスタイルの拡張であり、両者ともグルへの信愛を表現する形態となっている。しかし、GBを生み出す敬虔さは別のものであり、その焦点が第1代グルではなく第10代グルに移っている。GBに明らかに先行するものが、DGに描かれたグル＝ゴービンド・スィングの初期の生涯を描いた『バチッタル・ナータク』である。第10代グルを正義回復のため地上に降誕させ、パントの最終的な勝利への約束をもたらした神意が強調されている。勝利を獲得する手段が剣であり、それによってのみ悪魔の力が破壊されうるのである。

GBスタイルの初例は、『グル・ソーバー』(*Gur Sobhā* 「グルの燦然たる輝き」)で、サイナーパティ (Saināpati) という作者に帰せられる物語詩である。この作品には1711年と1745年という奥付があり、18世紀初頭のパント内部の信条と伝統を立証するものとして貴重である。その顕著な点が、「カールサー」と「ことば」(聖典)こそ、人間としてのグルたちの死後、グルの権威を継承するものとして最大限の重要性を強調していることである。GBの伝統の他の三つの作品は、スカー・スィング (Sukhā Singh) の『グル・ピラース・ダスウィン・パートサーヒー』(*Gur-bilās Dasvīm Pātsāhī*)、コーエル・スィング (Koer Singh) の『グル・ピラース・パートサーヒー10』(*Gur-bilās Pātsāhī 10*) そしてソーハン (Sohan) の『グル・ピラース・チェウィン・パートサーヒー』(*Gur-bilās Chevīm Pātsāhī*) である。後者の2篇は18世紀のもと主張しているが、19世紀半

ばの作品である。

19世紀半ばまで、パントの英雄時代が続いた。ランジート・スィングの死とイギリスのパンジャブ支配までの間の1841年、ラタン・スィング・バンゲー (Ratan Singh Bhaṅgū) は『ブラーチーン・パント・プラカーシュ』(*Prācīn Panth Prakāś*) を編纂した。ラタン・スィングは同じように神意と闘争を強調しているが、かれの主眼は明らかにカールサーに置かれている。かれの主張によれば、カールサーはパンジャブ支配のために創始されたのであり、その規律を知っている者はだれでも、その権利の行使に備えていなければならない、ということである。1841年のパンジャブ地方は混乱に滑り込みつつあり、それは間もなく対英戦争となった。再びカールサーが試されることになったのである。

ラタン・スィングの編纂の3年後に、他の作品が編み上げられた。サントーク・スィング (Santokh Singh) の『グル・プラタープ・スーラエ』(*Gur Pratāp Sūray*)、一般的には『スーラジ・プラカーシュ』(*Sūraj Prakāś*) と知られている作品である。『スーラジ・プラカーシュ』は、初期の形態と関心へと戻ったが、そのことで、この作品が大きな影響力を失うことはなかった。サントーク・スィングの以前の作品は『ナーナク・プラカーシュ』で厳密にJSの一つであるが、先行する作品と唯一異なる点は、韻文で書かれたことである。『スーラジ・プラカーシュ』で、かれはJSのスタイルをナーナク以後の後継者にも当てはめた。この作者が後代の発展の影響を受けなかったことは決してないが、この膨大な詩作品は、ラタン・スィング・バンゲーによるカールサーの例ではなく、17世紀の伝統に従っている。

カールサーを強調する伝統は持続し、ラタン・スィングの後継者がすぐに現れた。ギアーン・スィング (Giān Singh) が1880年に『パント・プラカーシュ』(*Panth Prakāś*) を発刊したのである。また、かれは1891年と1919年に膨大な『タワーリーフ・グル・カールサー』(*Tavārīkh Guru Khālsā* 「グル・カールサーの歴史」) を著した。形式と手法の点で、この作品はパントの通俗的な歴史と思われる。スィクの信条は、パントの歴史と密接に結びついており、その歴史との関連性のなかに、必然的に教学的な多くの内容が含まれているのである。このことは、グルたちの生涯を崇敬の念をもって表現することに明らかであり、英雄や殉教者

たちに最大の敬意が払われ、カールサーの役割に対して執拗な強調点が置かれているのである。信仰上の英雄として、特別の地位を占めているのがランジート・シングであり、かれは19世紀の初めの40年間、カールサーの名の下にパンジャブを支配したのであった。こうした歴史的に強い観点から見ると、歴史的な作品がパントの文献のなかでたいへん目立つのは驚くべきことではない。このような作品が、シイクの信仰と教学を理解するうえで基本的な資料として受け入れられるべきと思われる。

8 ニランカーリー派とナムダーリー派

ランジート・シングはシイク教の最大の英雄の一人として想起されているが、パント内でグルたちの本来の教えに対する視点を失ってしまったと考えている同時代の人々もいた。かれらは、軍事的衝突や政治的成功は神の名号の教えと「神の名号の憶念」(*nām simaran*)の修練が必須であると信じていた。こうした人々のなかに、ラーワルピンディー (Rāwalpīṇḍī) の町に住んでいたバーバー＝ダヤール (Bābā Dayāl) と、ハズロー (Hazro) の町の近くの町に住んでいたバーラク・シング (Bālak Singh) であった。前者の後継者たちがニランカーリー (Niraṅkāri) 派と呼ばれ、後者、特にその弟子であるラーム・シングの後継者たちがナムダーリー (Nāmdhāri) 派あるいはクーカー (Kūkā) 派と呼ばれている。

ニランカーリー派の名称は、バーバー＝ダヤールが「無形態なる神」(Niraṅkā) 崇拝を強調したことに由来している。神は無形態なので、化身することも神像として表すこともできない。そこで信徒はグル＝ナーナクの教えに立ち戻って神の名号への瞑想を修練すべきである⁸。この派にとって重要な唯一の聖典は AD であり、他の文献は修練するのに必要ないと考えていた。それゆえ、この派では比較的近年に至るまで、ほとんど記録がなされていなかった。しかし、唯一の文献が19世紀以降

⁸ この派の初期の状況については、C.B. Webster, *The Nirankari Sikhs*, (Delhi, 1979) を参照。

存在し、それは、『フカム・ナーマー』(*Hukam-nāmā*) と呼ばれ、バーバー＝ダヤールの最初の弟子であるバーバー＝ダルバーラー・スィング (Darbārā Singh) が発した教えである。『フカム・ナーマー』は実際には RN であり、1873 年以前に出された。ニランカーリー派の文献は、1947 年の印パ分離独立時にラーワルピンディーにあった本部を放棄せざるを得なかったのち、ほんとうに少ない。この派は新天地に移ったのちに、自派の歴史と教義を広めるために出版事業を開始した。この事業の顕著な成果は、スィング・ニランカーリーが自派の歴史をまとめた『ニランカーリー・グルマツ・プラーランビター』(*Nirankārī Gurmat Prārambhitā*) である。

ナムダーリー派は、ニランカーリー派がパンジャブ社会の別の階層から信徒を集めていた時と同じ時期に、パンジャブの同じ北西地域に出現した。しかし、ナムダーリー派はニランカーリー派とは別の行程をたどった。バーラク・スィングの弟子ラーム・スィングは、ルディアーナー (Ludhiānā) 県バイニー・ライアン (Bhainī Raian) 村出身の大工であった。かれは、ランジート・スィング軍に勤務していた時に師に会い、1862 年ナムダーリー派のグルとなった後に故郷に帰還する間に布教した。かれの信徒はルディアーナー県と近隣の村落出身者が多く、その多くが貧しい低階層に属する人たちであった。1871-72 年にイギリス権力と激しく抗争し、その結果、ラーム・スィングはランゲーンに流刑となった。ナムダーリー派はこの困難を生き抜き、白い服を着て目立つターバンを着けた彼らは、今日でもパンジャブやその他の地域で見られる⁹。

ナムダーリー派とニランカーリー派の歴史は異なるが、両者の文献は同じパターンである。19 世紀以来、残っている文献はたいへん少ないが、最も重要なのはラーム・スィングの名前で出された RN である。文献の少なさは近年まで続いているが、教学の護持の必要性を認識したナムダーリー派は、刊行事業を開始した。そのうちで主要なものは儀

⁹ ナムダーリー派の概要については、W.H. McLeod, "The Kukas : a millenarian sect of the Punjab," in G.A. Wood & P.S. O'Connor (ed.), *W.P. Morrell : a Tribute* (Dunedin, 1973), pp.85-103, 272-6. を参照。Cf. McLeod 1990.

札の手引き書で、『ナムダーリー・ニットネーム』(*Nāmdhārī Nitnem*)である。この書は、ナムダーリー派が正統派のシクたちと多くの共通の教学をもっていることを示している。また相違点は、正統派のシクたちが人間のグルの伝統が1708年に終わっていることを認めているのに対して、ナムダーリー派はグル位が継続していると主張している点である。

おわりに

1849年、パンジャープ地方はイギリスによって完全併合された。それ以前、1873年、アムリットサル・ミッション・スクールの4人のシク教生徒がキリスト教に改宗を決意したというニュースが伝わり、これに警戒した主立ったシク教徒が同年アムリットサルで会合を開き、また同じようにラーホールでも会合が開かれスィング協会が結成された。他の地域の同時代の同様な組織と同じように、この協会の目的は、自民族の教育、社会改革、そしてシク教教学の整備であった。

こうした運動のなかで、特に注目すべき業績は、協会の学者であったカーン・スィング・ナーバー (Kān Singh Nābhā) が著したシク教事典ともいべき浩瀚な『グルシャバド・ラトナーカル・マハーン・コーシュ』(*Guruśabad Ratnākar Mahān Kōś* 1931年刊)であった¹⁰。

以上、第1代グル＝ナーナクの時代から近代に至るまでの、広義の聖典を時系列的に素描してきた。これらの諸聖典の多くは、海外在住のシク教徒研究者が通信情報技術を駆使して公開しており、刊本入手困難な、あるいは刊本になっていない聖典に容易にアクセス可能である。これらの業績を踏まえ、将来、GSの忠実な和訳に行う予定である。

【主要参考文献】

Cole, W. Owen & Piara Singh Sambhi, *The Sikhs : Their Religious Beliefs and Practices*, London : Routledge & Kegan Paul, 1978. (溝上富夫訳『シク教—歴史と教義』筑摩書房、1986年)

¹⁰ McLeod, 1990, pp.14-15.

do. A Popular Dictionary of Sikhism, London : Curzon Press, 1990.

Callewaert, Winand M., *Śrī Gurū Granth Sāhib with Complete Index*, Delhi : Motilal Banarsidass, 1996.

この他、Shiromani Gurdwara Parbandhak Committee 刊行のグルムキー文字・デーヴァナーガリー文字版も使用。

McLeod, W.H., *Textual Sources for the Study of Sikhism*, Chicago : University of Chicago Press, 1990.

do. *Historical Dictionary of Sikhism*, London : Scarecrow Press, 1995.

do. *Sikhs and Sikhism*, New Delhi : OUP, 2000

この中に、*Guru Nanak and the Sikh Religion*, Oxford:the Clarendon Press (1968) : *The Evolution of the Sikh Community. Delhi*, Oxford : the Clarendon Press (1976) : *Early Sikh Tradition. A study of the janam-sakhis*, Oxford : the Clarendon Press (1980) が再収録されている。